

鞠智城についての一考察

はじめに

北部九州と朝鮮との交流関係は縄文時代に遡って連綿と続けられてきたことは、考古学的資料の良く物語るところである（甲元他2002）。しかし北部九州が東アジアの歴史的な大きなうねりの中に登場するのは、5世紀の第三四半期から6世紀第三四半期と7世紀後半期の2時期であり、しかもこの2時期はいずれも百済の動向と常に歩を一にするという特異な社会状況の中での出来事であった。このことは5世紀後半から6世紀前半期にかけての時期、北部九州で大量に出土する伽耶系・百済系遺物の存在や彼我の墓制の共通性、7世紀後半期における百済系山城の築造などの考古学的事実如実に示される。前者の古墳時代の問題に関しては近刊の忠南大学校百済研究所の『百済研究』誌に一文を綴ったので（甲元2005）、ここではこれまで論じられることが少なかった熊本県北部の築造された鞠智城についてみて行くことにしよう。

1. 鞠智城の研究略史

熊本県北部、菊池川上流右岸の台地上に立地する米原地区が古文献に記す「鞠智城」の遺跡に対応するという認識のはじまりは、江戸時代後期にまで遡する（菊鹿町教育委員会1981）。その後1930年代から40年代の前半期にかけて九州在住の研究者により細々とではあるが現地踏査がなされ、その結果大野城や基肄城と並んで朝鮮式山城の一つであるという確信は得られていた（久保山1931）。その後坂本経堯氏により米原地区で礎石を有する建物跡と3カ所の門礎が明らかにされ、古代山城である鞠智城に該当するものであることの詳しい検討結果が公表された（坂本1937）。戦後になっても断片的な踏査は行われていたが、出土遺構の個々の性格把握までには至らないままに、1959年「史跡伝鞠智城」として熊本県の指定遺跡となった。「幻の鞠智城」と称された所以である。

1960年代後半には熊本県北部地域で圃場整備事業が大規模に実施されることとなり、米原地区もその対象となった。これに伴う緊急調査が1967年から1981年まで熊本県教育委員会によりなされ、7次にわたる遺構検出と遺跡範囲確認調査により多数の倉庫群と3カ所の門礎跡が発掘された。これにより米原地区の古代遺跡は文献に記載された鞠智城跡の一部であることが明確になり、鞠智城を囲む土塁線の一部も実地に確認することができた（菊鹿町教育委員会1981、熊本県教育委員会1983）。

1986年以降、鞠智城を古代山城址としての国の指定遺跡にするための本格的調査が熊本県教育委員会により毎年行われ、倉庫群、兵舎、鼓楼、管理棟などが次第に明らかにされた。また門の構造や周囲を巡る土塁の発掘と検証がなされることで、鞠智城の全体像の輪郭が捉えられるようになり、2004年2月国の史跡に指定された。

ところがこの鞠智城が大野城や基肄城を始めとするその他の古代山城跡とどのように関連す

るか、その性格に関しては依然として学会共通の認識はえられていない。いわば「古代山城址」としての歴史的 성격に関しては、現在のところ諸説紛々とした状況にあるといっても過言ではないのである（熊本県教育委員会1990）。

鞠智城をめぐる調査研究においては、上述のように大きく3段階にかけて検討することが可能であろう。戦前の踏査を中心とした調査からえられた坂本経堯氏の見解、1967年からの緊急調査により具体的な遺構の把握がなされた段階での熊本県教育委員会の見解（熊本県教育委員会1983、鳥津1983）、国の指定遺跡にするための総合的調査がなされた段階での調査担当者の見解（大田1995、西住1999）である。熊本県による最終的な調査総括はまだ提示されていないが、国の史跡に指定された後は水門などの補足的調査が計画されているものの、従来どおりの大規模な発掘調査は今後予定されていないので、永らく鞠智城調査に関係した者の一人として、ここで過去の調査結果を概括しながら鞠智城に関する私見を披瀝することにする。

2. 坂本経堯氏の見解

坂本氏の見解に関する論考が公にされたのは1953年のことであるが（坂本1953）、原稿は1937年6月に完成したものであり、基本的には戦前の研究者達の踏査に基づく考察のまとめとすることができる。

立地：米原遺跡（鞠智城推定地）は急峻な侵食谷により囲まれた天然の要害上に立地し、国府を含め肥後北部の主要地域を遠望でき、近傍の防烽址などとともに古代遺跡と相関し、かつ大宰府への交通路に面するという、古代山城としての立地条件から説き起こして行く。

城門址：鞠智城の南門に該当する場所（掘切）にある花崗岩の平石で、一方に偏って径5寸、深さ5寸の穿孔がある。これと対応するものは掘切部落の木野神社で手水鉢として現存している。また東門に相当する堂床（深迫）にも花崗岩の平石があり、これにも径6寸深さ5寸の孔が穿たれている。さらに西門にあたる池の尾にも卵形をした花崗岩の平石があり、これにも径6寸深さ5寸の孔がみられる。これらは門礎の一部で、門扉の回転軸を挿入するための設え—唐居敷—と考えられる。

建物礎石群：米原一帯には礎石が多く検出される。うち2列東西に並び礎石の間隔は7尺を測り、基肆城の不動倉の礎石配列と一致する。また付近から布目瓦や焼き米が検出されることもこれを裏付ける。また西側の高台である田子山（長者山）には礎石群が多く認められる。

水門址：菊鹿盆地から鞠智城に入る溪谷の頭合（ずごう）の削平された丘陵上に礎石群があり、台地の価格が狭まる谷間には花崗岩の集合が認められることから、水門の可能性が指摘できる。

土塁線：頭合の大門址推定地から山稜の頂部を巡るように見られる。西側の土塁は頂部を平坦に均して外側を急峻に切り取って壘壁とし、頂上近くの低い部分にのみ築堤を拵えている。土塁の幅は約2間を測る。

以上のような米原遺跡の遺構の状況は、大野城や基肆城と同様の古代の山城址であることを

物語っており、文献に言う鞠智城に比定することが可能である。

それでは何故この地域に山城が築造されたのか。これに関しては

- ① 有明海より進入する外的に備えること。
- ② 肥後の物資・兵器を蓄えて大宰府の非常に備えること。
- ③ 九州南部に蟠居し、叛服常なき熊襲への備えとしたこと。

を挙げ、基本的にはそれまでに確認されていた大野城や基肆城などと同様の古代山城址であり、大宰府への備えとしての性格、大宰府の南側の守りとしての役割を想定したものである。その創建の年代については大野城、基肆城とともに天智4年を想定し、築造後33年すなわち文武2年の繕治は外敵に対する備えとともに、九州南部の動向にも気を配ったものである可能性を想定していることは注目される。それは文武9年には薩摩の隼人が反乱を起こし、天平頃までは薩摩には班田収受が行われなかったことを根拠とするものであり、唐との関係が修復した後は却って九州南部地域に備えての「柵」的な性格へと変換したとも考えられるのである。

この論文には図面が掲載されていないために、正確な地点の特定に困難をきたす点もあるが、坂本氏の鞠智城に対する認識は今日からみても極めて正鵠をえたものであり、発掘調査を経ない段階での遺跡の性格把握の眼力には驚かされる思いである。

3. 島津義昭氏の見解

1967年から鞠智城址の本格的な調査が開始された。1967年から69年と79年度は開田事業に伴う緊急発掘であったが、それ以降の3年間は遺跡の性格と範囲確定のための調査が行われた。この期間に行われた調査結果に基づく鞠智城址に関する所見は、島津義昭氏によって2度にわたり以下のようにまとめられている（熊本県教育委員会1983、島津1983）。

門礎石：深迫の門礎石（東門）はほぼ旧状を保っており、この礎石の直上部分での発掘調査により、幅約2mほどの道路状遺構が確認された。また付近から布目瓦が検出され、瓦葺の門施設であったことが知られた。堀切門礎石（南門）は木野神社の手水鉢に使用されたものと同一個体であることが確かめられた。復元長径は3.64mを測り、穿孔の間隔は2.51mで観音開きの門扉の大きさが確定された。またこの礎石の表面の削痕から内開きであったことが推定されている。池ノ尾門礎石（西門）は原位置を失っていることが確認された。この礎石から10mほど川底を遡った地点に石の塊が検出されたが、石垣と認定するには至っていない。なお北門の位置は未確定である（第1図）。

建物礎石群：米原台地の北端部の佐官どん、中央部に位置する長者原、長者山東麓の宮野それに米原西側の長者山で建物礎石が検出された。これらのうち宮野礎石が9間に3間の瓦葺建物以外は、4間に3間の倉庫であり大野城のそれと規模が一致し、付近から大量の焼き米が出土することから礎石群の大部分は不動倉（米倉）と想定される。

土塁：米原台地の縁辺部を廻る内郭線と背後の山稜を取り込む外郭線の二重構造に土塁が形成



第1図 1983年段階で把握された鞠智城

されている可能性がある。但し外郭線は明確には把握されていない。内郭線は西方の池ノ尾門礎から佐官どんに至る山稜頂部を結ぶ線が確認され、北、東、南は急峻な崖により防御線がはられていた。すなわち内郭線の長さは3.5kmに及ぶ。内郭を取り囲む西方の土塁には、

- a 自然の尾根を利用して外側を切り落として急な崖をつくり、内側を平坦にならしたものの。
- b 版築により人工的な盛土としたものがあり、土塁の高さは1.5m から 2 m を測る。また連続する土塁の中途には、削平されてかなりの広さの平坦部が認められ、何らかの施設があった可能性もある。

出土遺物：単弁八葉の蓮華文軒丸瓦は白鳳期にみられる百済系瓦で、大野城出土瓦と類似するが、やや後出するものである。

こうした当時までの所見を基にして、次のように総括した。

- ① 鞠智城には3つの異なった建物群が存在する。それらは文献にみえる「兵庫」、「不動倉」（4間に3間の建物）、「城院」に相当するものがある。
- ② 城域の広さは3.5km で規模からすると大野城や基肄城に次ぐ大きさである。
- ③ 大野城などと比較して、低い平坦部に立地し、城域に谷を包む点、水門や石垣が見られないことなどの違いがある。

従って鞠智城は7世紀後半期に築造された古代山城ではあるが、「戦略的な意味よりも、軍略的な意味が強かった」という鏡山猛氏の意見（鏡山1968）に島津氏は左袒している。

この時期、鞠智城の城域が確定したこと、城域は土塁と自然地形（急峻な崖）で画されること、性格の異なる建物群で遺構が構成されること、7世紀後半期の構築であることなどが確認され、大野城など同一の時代的要請で構築されたことなどが初めて具体的に明らかにされたことは重要である。

一方大野城や基肄城と比べ、「古代山城址」通有の特徴とは言い難い特異な面も指摘され、これをめぐって1990年初めまで様々な意見が提示された。それに関しては熊本県教育委員会作成の報告書に簡単に触れられている（熊本県教育委員会1990）。これら議論の中で百済の山城との比較の観点から鞠智城の性格の特異性を論じた成周鐸氏の注目すべき意見を紹介することにしよう（成周鐸1984）。

4. 成周鐸氏の見解

成周鐸氏の鞠智城に関する基本的情報は、1983年の熊本県教育委員会報告と島津義昭氏の論攷による。いわば1983年段階の熊本県教育委員会の見解に対して、自身がこれまでに行ってきた百済地域の山城址との比較検討を基本として新たな考えを提示した。

成周鐸氏は鞠智城が大野城などとともに百済の山城址との類似性が高いことを指摘し、さらに大野城や基肄城など「山上包谷式」山城とは異なって、鞠智城の主体部が丘陵上に構築されている点（「平地丘陵式」山城）にその性格の端的な現れとみなす。こうした立地的特徴は土塁で城域を区画することなども含めて、ソウルの夢村土城や泗泚都城と共通することを根拠に、宮野大型建物など倉庫とは考えがたい建物の存在を前提にして、最初は「宮」的施設から後に兵庫、や不動倉、城院に再利用された可能性を説いている。百済の場合には都城としての夢村土城と二聖山城や南漢山城、泗泚都城と青馬山城の組み合わせで構成されており、鞠智城はむ

しろ都城の性格が強いことを示すと考えられる。即ち鞠智城は「都城的性格」から出発し、後に「物資の備蓄基地」へと性格が変化したのではないかとの注目すべき意見が提示された。

この時期日本の研究者の多くが古代山城との共通性を強調するのに対して（小田1985a b）、鞠智城は山城址と一体になった都城址という異なった性格を具備したものであることの指摘がなされ、鞠智城の性格をめぐる論争に一石を投じたのであった。この成周鐸氏の見解は後に岡田茂弘氏による、南九州を睨む「柵」的性格の遺構へ変化したという考え方に引き継がれてゆく（熊本県教育委員会1990）。

5. 1990年代の新しい調査知見

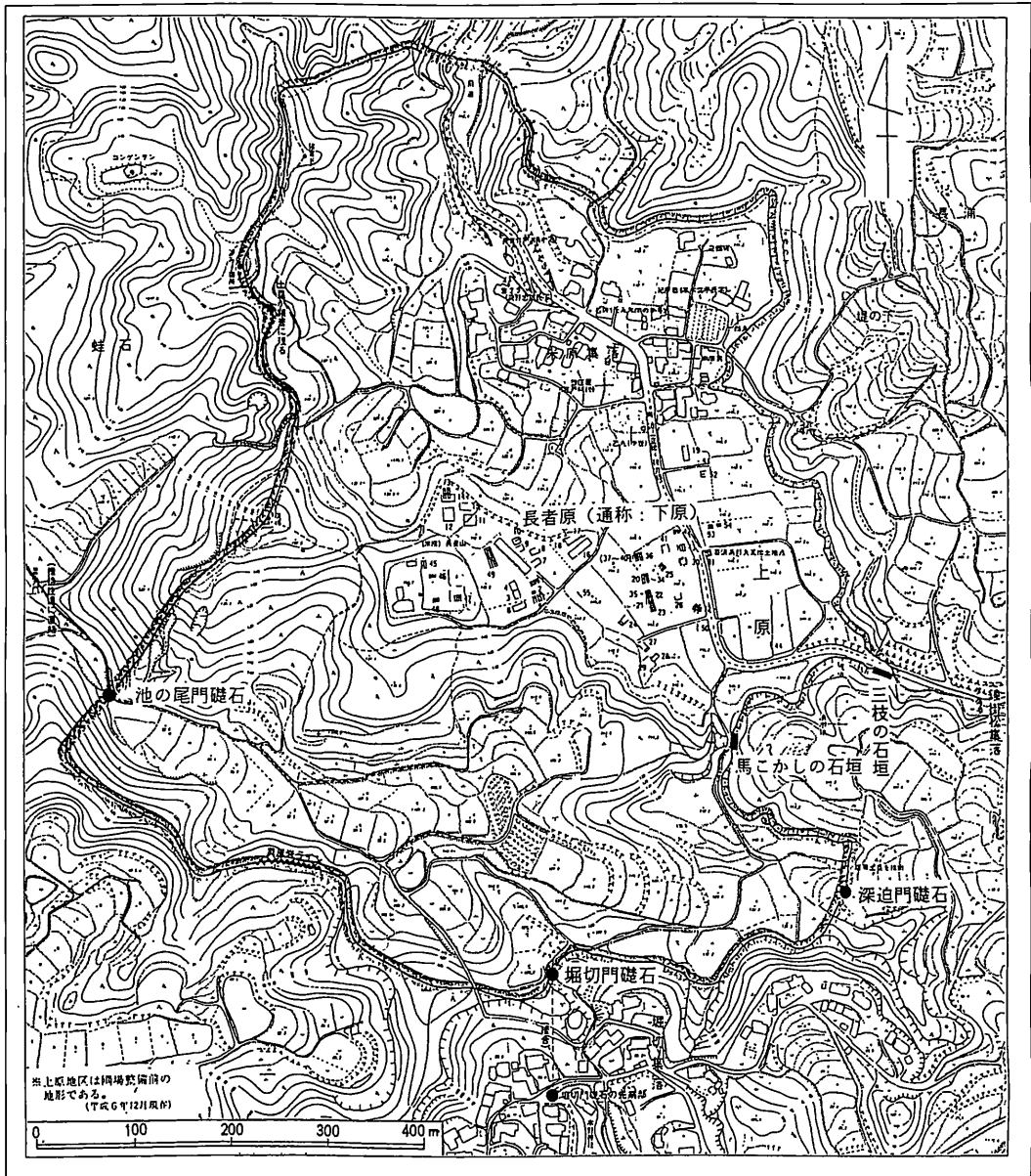
その後熊本県教育委員会により、鞠智城を国の指定遺跡に向けての発掘調査が計画的・精力的に行われ、従来とは異なった新しい知見が次々に得られるようになった。

まず挙げなければならないのは、礎石建物以外に掘立柱の建物が数多く存在することが明らかにされたことである。中には礎石建物の外周に掘立柱構造を有するものも存在していたことが判明した。こうした建物群は6世紀後半代の堅穴住居址を覆っており、確実にそれ以後の構築物であること、7世紀中葉の須恵器が存在することから建物の一部は天智4年築城になる大野城や基肆城よりも遡る可能性があること⁽¹⁾、出土した遺物の年代から9世紀前半段階までこの遺跡が継続使用されたことなど新たな知見がえられた（熊本県教育委員会1991）。

さらに掘立柱建物群は総柱のものと側柱のみのものがあり、両者ともに大きさや柱間の規格に異なりが認められる。また礎石に掘立柱の庇をもつ建物が存在し、倉庫、兵舎あるいは兵庫以外の性格をもつ建物群が存在することが明らかにされ、鞠智城のもつ意味を再検討する必要が提起された（熊本県教育委員会1991）。

1991年の第13次調査においては米原台地のほぼ中央部において2棟の八角円堂（鼓楼）が発掘された。それぞれ建替えの痕跡が認められ、少なくとも2時期にわたってこの特殊な建物が存在していたことが新たに知られるようになった（熊本県教育委員会1992）。うち33号址は32号址を建替えたものであり、外径は9.8m、中径6.7m、内径4mを測る。これは韓国河南省にある百済の山城址である二聖山城の八角円堂と同一の構造であり、鞠智城が百済との関係が深いことを示すとともに、この建物の性格をめぐる新たな議論を呼ぶこととなった。但し二聖山城では八角円堂は礎石をもつものであり、それ以外に九角形、十二角形の円堂もあって、同時存在でありながら機能を異にする建物と推定されている。また忠清南道燕岐郡の公州山城や雲住山城でも十二角形の円堂が発掘されている（高正龍1995）。鞠智城の場合はほぼ同じ規模の2棟の八角円堂（鼓楼）が、はたして同時存在であったか否かという点に関しては明らかにされていない（第2・3図）。ともあれ鞠智城が百済山城との関係が深いことを示す性格の建物で構成されていることが明らかにされたことは意義深い。

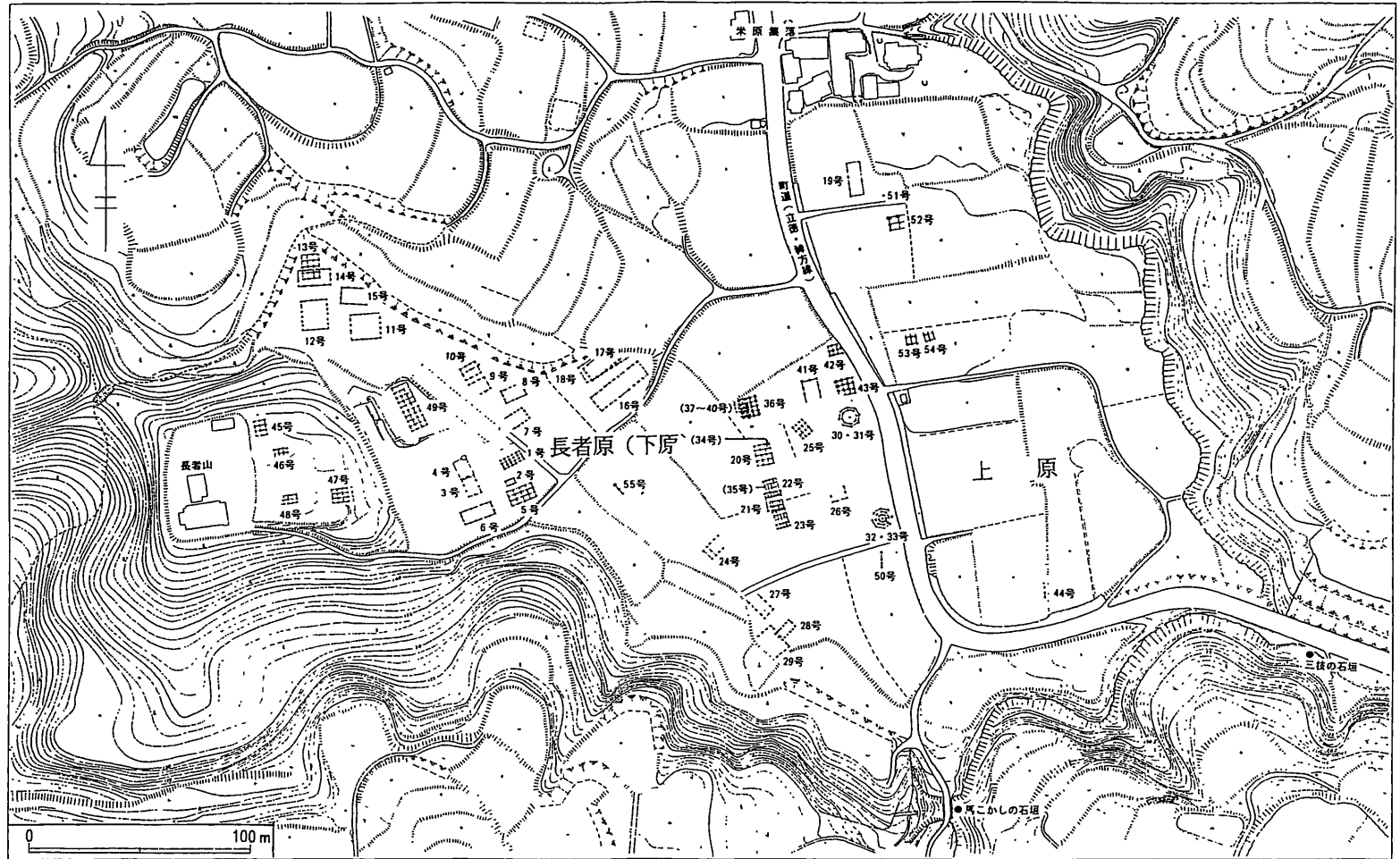
第18次調査以降では建物構築時の整地面の検出に調査の重点がおかれ、整地面と建物群の層位関係から鞠智城の建物群は基本的には4時期に区別することが可能であることが把握された。



第2図 1990年段階で把握された鞠智城

これにより同一時期の建物群の規模と配置を確定することが可能になり、鞠智城の性格を考察するうえで重要な成果がえられたのであった（熊本県教育委員会1997）。

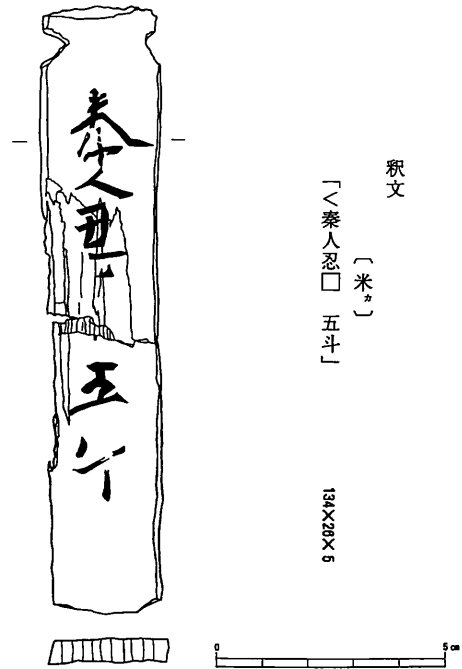
1997年の第19次調査においては米原台地北よりの長者原地区において、溝に区画された内部に3間に7間の掘立柱建物4棟が存在し、それらは2棟ずつ並存あるいは直行していたことが明らかにされ、しかも層位的には最古の段階に属する建物であることが確認された（熊本県教育委員会1998）。また4号溝で画された内部に並列もしくは直行する形で大型建物群が形成され、百済系の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が付近から採取されたことも、鞠智城の瓦建物の創建時期



第3図 1990年段階で把握された鞠智城遺構配置図

を確定する上でも、性格を把握する上でも極めて重要な発見であった。

またこの時期米原台地北側の谷に向かって傾斜する地点で池遺構があることが分かり、そこから「秦人忍米五斗」と墨書された荷札木簡が検出された（第4図）。平城宮出土木簡の中では特異な形式とされる西海道関係の調綿の荷札と類似した特徴をもち、大宰府出土木簡と共通している点は注目される（平川1998）。7世紀後半から8世紀前半期の遺物と共伴したことから、その中でも古い時期に属するものと想定する人もいるが、大宝令以前の荷札木簡は年を干支で書き、冒頭に置く型式であるのに対して、平城宮出土の木簡の型式に準ずること（東野1983）や、書体自体は天平期のそれに類似することから、鞠智城創建時期のものとは考え難い。この木簡は文献の記載を欠く8世紀の前半期において、大宰府を通しての鞠智城の維持管理が継続していたことを示す史料と見るべきであろう。



第4図 鞠智城出土木簡

以上のように2000年までの調査により、鞠智城の概略を次のように把握することが可能になった。

- ① 鞠智城の最初の建物群は7世紀後半期に築造されたが、一部建物は斉明期まで遡上する可能性があること。出土資料からは9世紀後半までは使用されていたこと。
- ② 建物には掘立柱と礎石を有するものがあり、その規模も形態も違いがあり異なった性格の建物が存在すること。
- ③ 8世紀前半期までは大宰府との関係が深かったこと。
- ④ 大野城などとは違いとして、低い台地上にあること、溝で区画された「政庁」的建物や八角円堂（鼓楼）などの建物群があることが挙げられること。
- ⑤ 鞠智城の建物群の種類と規模に時期的な変遷があつて4時期に細分でき、時期的に建物の種類に違いが推察されること。
- ⑥ 土塁と急峻な崖により囲われた抱谷式の山城であつて内城と外城に区画され、内城周囲3.7kmで、55ヘクタールの面積を有し、外城は周囲5.8kmを測る大型の構造であること。

6. 近年の研究

鞠智城に関して調査指導委員の小田富士雄氏（小田1993）と調査担当者の西住欣一郎氏（西住1999）により興味深い検討結果が公にされている。この二つの論文を取上げて現時点での鞠智城の代表的意見として考えてみよう。

小田氏は鞠智城に関する調査結果に基づき、これを4地区に分けて遺構の分析をおこない、遺構が集中する米原地区と長者山・長者原地区の2地区が鞠智城の主要な建物群であることを指摘して、米原地区が城監などの居住する「管理中枢機構地区」であり、長者山・長者原地区が「武器・食糧を収納する倉庫群」とであると認定し、大野城における主城ヶ原と倉庫群に対比する。すなわち長者山には倉庫群がありその足下には宮野礎石建物が認められるのに対して、米原地区では八角形建物などの倉庫以外の遺構が認められること、韓国二聖山城で八角形建物が大型の建物に付随して場内の中心地区に設置されていることが念頭におかれている。また「少監どん」という小字名が米原地区に残されていることも。これを示唆するものであろう。

次に鞠智城の築城契機に関して、対大陸説、対熊襲・隼人説と対肥君説に分けて検討をおこなう。鞠智城が大野城や基肄城と同様に対大陸緊急事態に対処するための施設であることは容認するものの、立地する環境が大野・基肄城とは違い低い丘陵上にいとなまれることを重視して、それらとは異なった機能があったことを想定すべきであるとする。対熊襲・隼人説に対しては鞠智城が築造された7世紀の後半段階で、はたして大陸防衛以上に対隼人防衛の緊急性があったかと疑問を呈し、対肥君説については憶説に憶説を重ねたもので、当時の歴史的経緯が考慮されていないと否定する。結局鞠智城は、大野城などとは異なった対大陸戦略の一環として山城から出発し、後に周辺地区の「軍事・治安面に限られた」管理機関として歴史的役割を担ったものであろうとの見通しを、主として大宰府や大野城に関する当時の文献史料を引用しながら展開した。

鞠智城内の建物群の地区による性格の相違をはじめて明らかにしたものであり、また鞠智城が対大陸政策の一環として創建されながらも、歴史的推移のなかで規模を縮小しながらも「軍団」的役割に変化したことなど新しい見解が披瀝されている。

西住氏の論攷は従来知られた建物群を層位的見地から4時期に区分し、時期的に建物配置が異なる可能性があることを発掘資料により明らかにしたことが重要である。すなわち掘立柱建物群、礎石建物群はそれぞれ2時期に区分され、最も古い建物群は創建期で最も新しい礎石建物群は9世紀末であることが指摘されている。次いで小田氏が管理中枢的遺構とされた米原地区での大型建物群の検討を行い、長者原X区の大型建物は杭列もしくは柵列で区画された内側に配置され、「コ」字形に配置された大型建物群で構成されていることを指摘して、大宰府政庁南門前面の東側で検出された官衙遺構と同一の性格のものであると想定し、「管理中枢機構」があるという小田氏の考えが妥当なものであることを、具体的資料を提示して論じた。4時期に区分されるという鞠智城の遺構全体像は未だ明らかにされてはいないが、遺構の変遷を追いかけることにより、時期的な性格の変化をたどりうることを示したものとして極めて注目

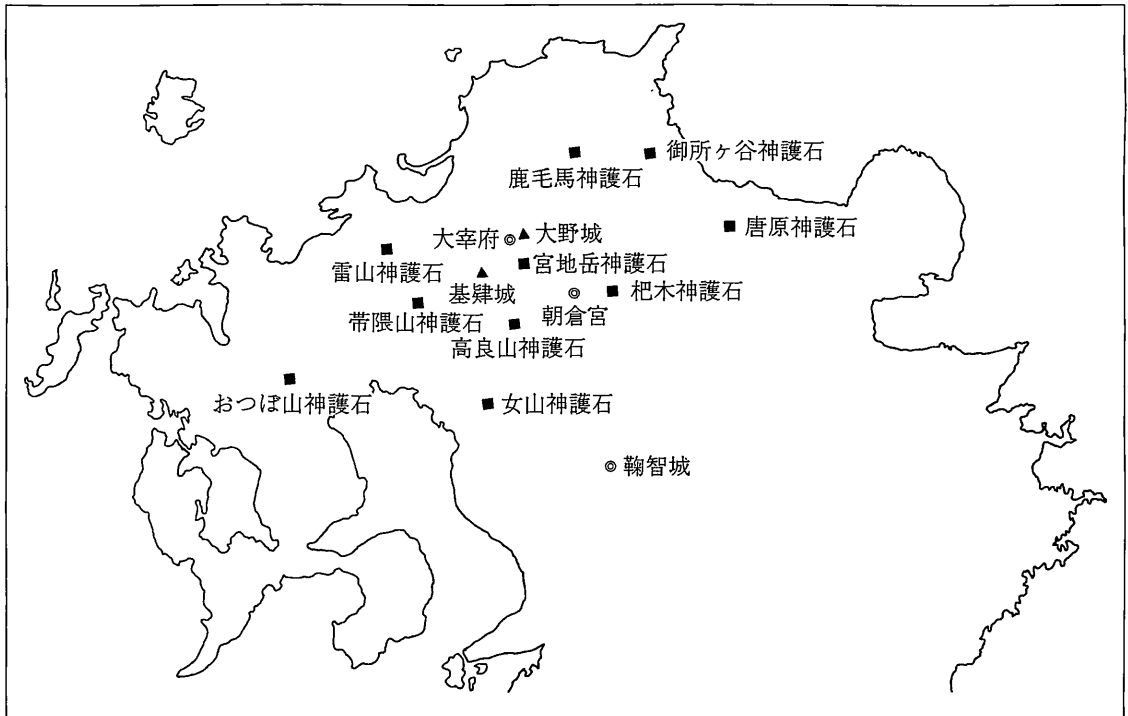
されるのである。

こうした検討を踏まえて西住氏は向井氏の説（向井1991）を引用するかたちで鞠智城の築城目的は大宰府陥落後の控えの拠点としての臨時施設と想定し、8世紀以降は南九州を背後より統括する役割を担う城としての機能変化を考えるものである。2棟の八角形の建物が掘立柱で構築されていることは、礎石建物群以前の時期のものであることを窺わせ、政庁的建物に伴う鼓堂とすることで、鞠智城の官衙的機能とよく一致をみせている。礎石建物で構築された八角形建物が見られないことは、鞠智城の性格が異なったものに変化したことを端的に物語るものであろう。

7. 山城址・神護石との関係

7世紀後半に築造された山城址は、唐による日本侵略計画（山尾1989）に対処するための防御施設であることは諸氏の考えの一致するところである。従来から鞠智城は古代山城址の一つとして位置づけられ、大野城などの山城址や高良山などの神護石との関連性が説かれてきた。7世紀後半段階以降に對外的な防御施設として築造された神護石・山城址の分布をみると、大きくは大宰府と畿内中心部を結ぶ線上にあり、当時の為政者にとって何処が防御のために最も緊急を要する場所であるかを明確に物語っている。ところが諸氏が指摘するように鞠智城の地政的位置はこれらからは大きく南に偏在していることは、鞠智城の歴史的な性格を考察するうえで見逃すことのできない点である（第5図）。

筑紫大宰の統べる施設が恒久的な官衙（大宰府）としていつ築造されたか必ずしも明らかではないが、斉明の朝倉橘広庭宮が放棄された後である可能性が高いことは念頭に置く必要がある（八木2002）。白村江での敗戦後、水城、大野城、基肄城、鞠智城、金田城、三野城、稻積城などの防御を目的とした施設が次々に構築されていたことは三野城と稻積城を除いて調査によりこれまで明らかにされてきた。三野城が福岡市博多区に、稻積城が福岡県糸島郡に想定しうるとすれば（磯村1979）、遺跡所在地からこれら山城址は大宰府擁護が主たる目的であったことを明確に物語る。しかしこの中で鞠智城だけは直線にして大宰府南方80kmの地にあり、その他の山城群で構成される大宰府防御線からは明らかに逸脱している。この防衛線から乖離した点を強調して、鞠智城を大宰府の「兵站基地」とみなす考えも提起されている。しかし当初から大宰府への兵站基地として企図されたのであれば、施設として瓦建物は不必要で、また所在地としては物資の確保と補給の便がいい交通の要衝に求められるべきであり、この点ではまずは朝倉宮想定地などの一大穀倉地帯である後川流域が最も相応しい。強いて菊池川流域にこれを求めるとすると、筑後へのルートとしては古墳時代以来の往還を考慮すると、山鹿周辺こそ第一候補に挙げられるべきであろう（山尾1999）。また兵站基地であれば奥まった高台上で急峻な崖に囲まれた地点をわざわざ選択し、3.7km以上にも及ぶ長大な土塁を構築する必要はないのであり、鞠智城創建当初から大宰府の「兵站基地」として捉える説はあまり説得力がない考えと言わざるをえない。



第5図 北部九州の神護石と山城址分布図

一方山城址と関連して大宰府管内での当時の防御施設と想定されている神護石は、

- 雷山神護石： 福岡県前原市
- 宮地岳神護石： 筑紫野市阿志岐
- 杷木神護石： 朝倉郡杷木町
- 高良山神護石： 久留米市御井町
- 女山神護石： 山門郡瀬高町
- 鹿毛馬神護石： 嘉穂郡潁田町
- 御所ヶ谷神護石： 行橋市津積・京都郡勝山町・犀川町
- 唐原神護石： 築上郡大平村
- おつば山神護石： 佐賀県武雄市
- 帯隈山神護石： 佐賀市

と九州ではこれまでに10ヶ所が知られている。古代山城址に比べより広い分布範囲であるが、雷山神護石が玄界灘からの、おつば山神護石、帯隈山神護石、女山神護石が有明海からの、御所ヶ谷神護石、唐原神護石が瀬戸内西部からの侵入にそれぞれ備えたものであることは容易に類推が可能である。このことは帯隈山神護石の足下、佐賀県上峰町に存在する堤土壘が帯隈山神護石と連携しての海からの最初の防御ラインであることから窺えるのである（八木充氏の御教示による）⁽²⁾。しかし鞠智城は有明海から30kmも内陸に入り、今日菊池川流域では、帯隈山神護石に対する堤土壘に比せられる防御施設はなんら確認されていない。このように鞠

智城は神護石の所在のあり方からもかけ離れた存在であることが知られる。

向井一雄氏は神護石が北部九州の交通の要衝や国府あるいは郡衙との対応関係を示す点を強調するが（向井1991）、九州において国制が整えられるのは持統期以降であり、国府や郡衙を神護石と直接関係付けることは時期的にみて困難である。神護石の分布からすると、海から遠く離れた場所にある鹿毛馬神護石、杷木神護石、宮地岳神護石、高良山神護石は、その所在する位置関係から大宰府というよりいずれも朝倉宮を取り囲むように配置されている。それぞれは博多湾、有明海、瀬戸内海に通じる重要な交通路上にあることが分かり、朝倉宮に対する内陸での第2防御線とすることが可能である。神護石の年代に関しては諸説ある（斎藤1968、坪井1975、葛原1994）が、対朝鮮での戦況が思わしくなくなった段階での防御的性格を勘案すれば、斉明期のもとする渡辺正気氏や西谷正氏の考えが妥当なものであろう（渡辺1988、西谷1999）。斉明天皇は多武峯の頂上の周りを取り巻く石垣をつくり、頂上部に高殿をこしらえるなど、石造構造物を造ることに熱心であったことは、このことを暗示するものである。

8. 鞠智城址の建物群

鞠智城址の発掘調査によりこれまでに72棟の建物址が検出されている（大田2004）。これら建物群が熊本県教育委員会の検討により4時期に区別される可能性のあることが指摘されている（熊本県教育委員会1997、西住1999）。それら建物群の全体像はまだ公表されておらず、時期別変遷に関してはなお未確定の部分が多いが、層位関係により掘立柱建物群が礎石建物群に先行して構築されたものであることは確認されている。大宰府遺跡においても礎石建物群が築造されるのは8世紀第十四半期後半とされる大宰府第2期であり、7世紀後半の創建期には掘立柱で構築された建物であったこと（九州歴史資料館2002）、大野城でも同様な結果が報告されていることとも一致をみせる（九州歴史資料館1979）。但し大宰府第1期の掘立柱建物群は切合関係から2時期に細分される可能性があることは留意しておく必要がある（九州歴史資料館2002）。

大田幸博氏によると、鞠智城址では次のような建物遺構の切合関係が認められる（大田1995）。

- ① 掘立柱建物相互の切合がある。18号→17号、40号→38・39号
- ② 掘立柱建物は礎石建物よりも古い。35号→22号、38・39号→36号
- ③ 礎石建物相互切合がある。22号→21号

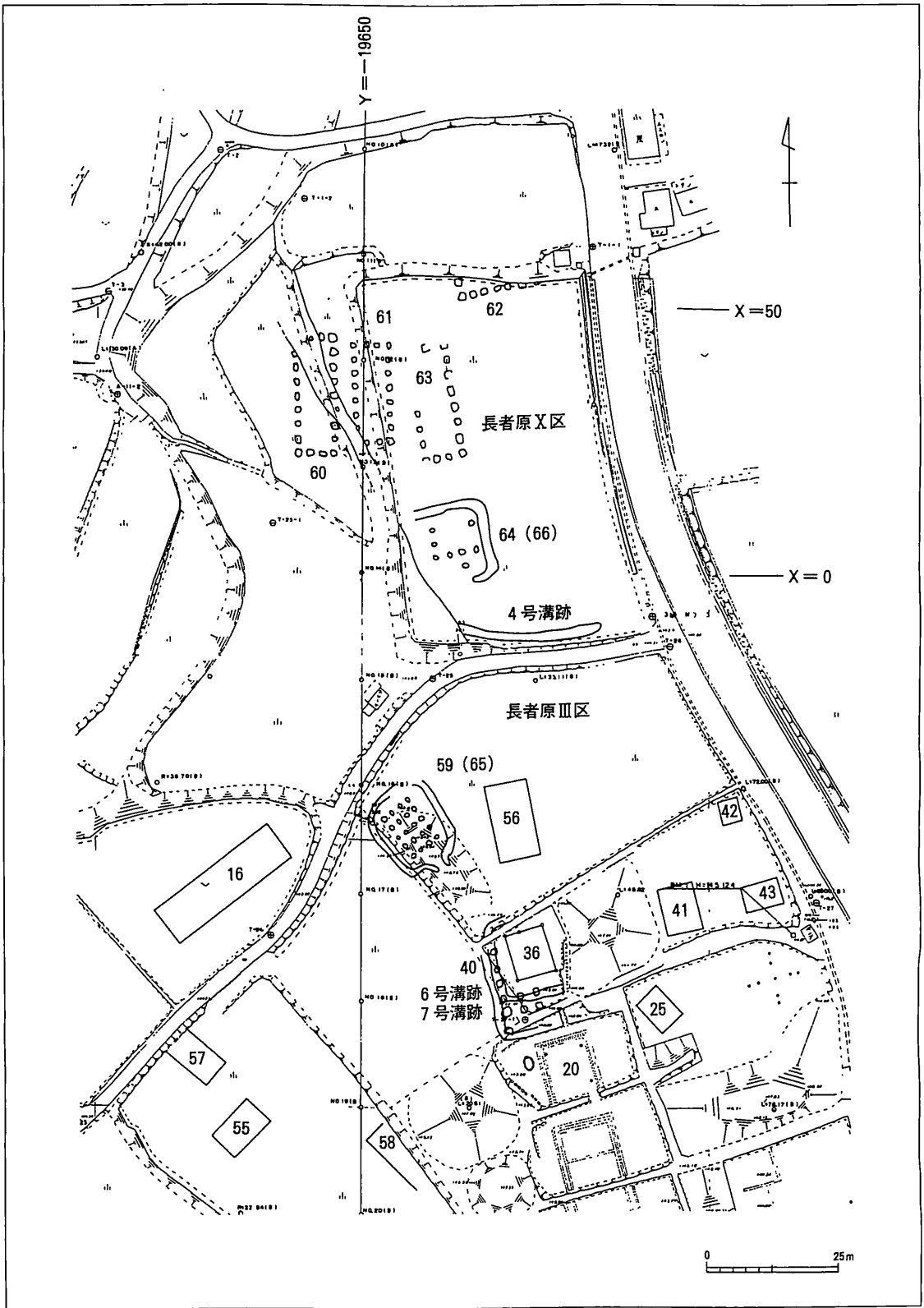
これにより鞠智城の建物は4時期に細分される可能性が高いことを示している。鞠智城址でこれまでに検出された遺構の時期別分布はこれまでに熊本県教育委員会により作成されているが（熊本県教育委員会1994）、礎石建物が1期に想定されるなど疑問が多く、またその根拠はあまり明確ではない。1994年段階の遺構配置図も実は1990年以前のものしか公表されていないために（熊本県教育委員会1994）、それ以降発掘された遺構は各年度の個別の報告書によるしかない。

長者原 X 地区では 4 号溝に区画された内側に 4 棟の掘立柱建物と 1 棟の礎石倉庫が存在している（第 6 図）。この溝には小さな穴が認められ、杭もしくは柵が設置されていたことが知られる。この内部で検出された建物群のうち礎石建物 64 号（66）は鞠智城では後出するものであり、しかも周囲を溝で囲まれているために、より外側の溝や柵列もしくは杭列とは無関係にあったことが窺われる。同時存在と想定されている 60 号（3 間に 8 間）、61 号（3 間に 7 間）建物は近接・並列しているのに対して 62 号と 63 号（3 間に 7 間）は直行する大型建物であり、60、61 号建物と 62、63 号建物は方位の軸にズレが見られることから二つの異なった時期の建物と考える。建物軸の統一性からすると、兵舎と想定される 16、17 号建物と 18 号建物と相関関係にあることが分かる。18 号建物は 17 号建物に切られているために、62、63、18 号建物のグループは 60、61、16、17 号グループよりも時期的に早い段階に属することとなる。62 号の東北 2/3 は破壊され、63 号と外側を画する溝の間には 64 号礎石倉庫があるが、その下部に整地層が見られることから礎石倉庫建設に先立つ何らかの建物遺構が存在していることが知られる。すると外側を画する 4 号溝と 63 号建物の間には 63 号と同様の建物が存在した可能性を示唆している。

62 号と 63 号建物のように「L」字形に建物が配置されるのは官衙遺跡に特徴的な構造で、長者原 X 地点は東北側が削平されていることから、これら建物群は本来的には朝堂院形式の「コ」字形配置をした建物群で構成されていたとすることが考えられる。即ち杭もしくは柵列で区画された内側では、「コ」字形に配置された政庁的な建物群から 2 棟が並列する大型建物群へと変遷していたことが知られる。掘立柱の倉庫も切合関係により 2 時期に細分できることから、礎石建物群以前の段階では「コ」字形に配置された大型建物群と 2 列配置された大型建物群とそれぞれ建物機軸の方向を一致させる兵舎、倉庫も 2 時期に区分することが可能となる。

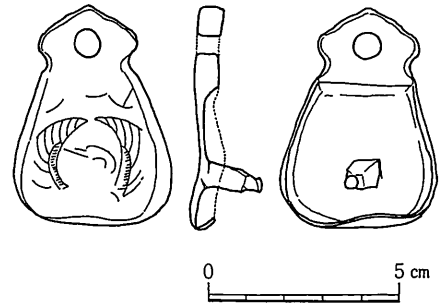
4 号溝で画された内部にある建物址の掘方及び柱根は、いずれも極めて大きく、そのうち 63 号址は 100～135cm に 80～110cm の大きさの掘方内部に直径が 40cm に及ぶ柱根をもつ大型建物で、こうした大きさの掘方や柱根は大宰府第 1 期の政庁建物のそれに匹敵する（九州歴史資料館 2002）。このことから鞠智城では最古に属する 62、63 号を有する建物群は、当初は政庁を中心とした建物配置をしていたと類推することができよう。この種の遺跡から検出が期待される遺構としては、不動倉、兵庫、兵舎、見張り台、管理棟、厨房が挙げられるが、第 2 期の並列大型建物群に伴う 17 号建物を兵舎とすると隣接する 16 号は武器庫との想定も可能であり、礎石建物以前に構築された重要な建物の種類の多くはその存在を指摘することが可能である。

宮野建物は東大寺正倉院との比較で長倉とされているが、ここで出土した「不明銅製品」とされる銅飾は木板に装着して破風に吊り下げる懸魚である（第 7 図）。したがってこれが宮野の建物址に伴うとしたら、米倉（不動倉）とするよりも庇が検出されない点を考慮すると武器庫（兵庫）もしくは兵舎であった可能性が高い。これとまったく同一の遺構は大野城でも検出されている（横田 1983）。SB065 と呼ばれるものであり、「官衙ふうの施設」とされる。これは大野城で最古段階に位置づけられている SB064 と同一場所でそれを切り込む形で構築されてい



第6図 長者原Ⅹ地点の遺構配置図

ることからすると、同一性格の建物の立替であった可能性が高い。SB060も同様に考えることができる。するとSB064→SB065→SB060と「兵庫」または「兵舎」の変遷を物語るものであろう。山城址の中核部分にはしばしば「四王寺」などの寺院もしくは塔頭が後に建設されることから、「管理棟」はむしろ四王寺集落付近と推測するほうがいいのではあるまいか。



第7図 宮野建物址出土懸魚実測図

以上鞠智城の調査結果からは、熊本県教育委員会により明らかにされた4枚の整地層を規準にすると、7世紀中頃の斉明期、7世紀後半の大宰府成立期に山城として改変された時期、大野城や基肆城とともに修理された時期、礎石建物に統一された時期と4時期に細分することが可能である。こうした変遷は大野城での建物変遷(横田1983)と基本的には軌を一にすることができよう。出土遺物から鞠智城は9世紀前半段階まで使用されていたことが知られるが、礎石建物で構築された段階では現在までのところ大型の政庁的建物がみられず、八角形建物もないことは、従前とはその社会的役割が大きく異なっていたことを窺わせるのである。それはともあれ、以上はあくまでも仮説の提示にすぎず、7世紀後半段階の鞠智城の歴史的 성격や意義付けに関してはこれと関連する朝倉橘広庭宮の建物配置が明らかにされることで、初めて明らかにされるようになるであろう。

終わりに

最後に鞠智城に関する古文献記事の検討を通して、これまでの発掘調査の成果を勘案しながらその歴史的性格を素描することにしよう。

文献に記載された鞠智城関係記事は以下の通りである。

1. 『続日本紀』文武天皇二年五月二十五日条 (698)
甲申。令大宰府繕治大野基肆鞠智三城。
2. 『日本文徳天皇実録』天安二年閏二月二十四日条 (858)
丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。
3. 『日本文徳天皇実録』天安二年閏二月二十五日条 (858)
丁巳。又鳴。
4. 『日本文徳天皇実録』天安二年六月二十日条 (858)
己酉。大宰府言。去五月一日。大風暴雨。官舎悉破。青苗朽失。九国二嶋尽被損傷。又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。
5. 『日本三代実録』貞観十七年六月二十日条 (875)
辛未。大宰府言。大鳥二集肥後玉名郡倉上。向西鳴。群鳥数百。噬拔菊池郡倉舎葺草。
6. 『日本三代実録』元慶三年三月十六日条 (879)

又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

『続日本紀』698年の記事は城が修理されたことを記すものであり、それ以前のどの時期に創建されたかは文献の上からは知ることはできない。このことに関して鏡山猛氏は『日本書紀』天智天皇九年二月条（670年）の、

又築長門城一。筑紫城二。

とある記事に注目し、筑紫二城のうち一つが鞠智城を示すものと解した（鏡山1968）。しかし本文は天智四年八月条の、

遣達率答嫩春初築城於長門国。遣達率憶礼福留。達率四比福夫於筑紫国大野及椽二城。との重複記事の可能性が高いことが指摘されている（坂本1955）ので、これに従うことはできない。

持統天皇三年九月条（689年）の、

遣直参石上朝臣麿。直広肆石川朝臣虫名等於筑紫。給送位記。且監新城。

記事にある「新城」は新しい都城を示すものとする解釈がこれまで学界では受け入れられてきた（岸1988）。しかし先述したように大宰府の礎石建物が完成したのはこの記事より遅れる霊亀年間であり、大野城も同時期に礎石建物に造り替えられていることから、大宰府周辺地域の都城や山城に当てはめることはできない。この記事から言えることは大宰府管轄の中での大野城や基肆城とは違った城を689年に視察したことだけである。したがって大野城や基肆城に匹敵する規模をもつ鞠智城がここでいう新城を示す可能性は極めて高い。このことが首肯されるなら668年から689年の間に鞠智城が築造されたと想定するしかないであろう。この期間内であれば大野城出土瓦に比べやや後出する単弁八葉蓮華文軒丸瓦の時期に良く符合する。

しかし先にもみたように、斉明期に遡って政庁的な建物群が鞠智城においてすでに存在した可能性を考えるなら、朝倉宮を放棄した後に大宰府が本格的な都城として掘立柱建物群で構築された時期に、山城としての本格的な改築が行われたとも解することができよう。

9世紀中葉にみられる文献記事からは、菊池城には「城院」、「兵庫」、「不動倉」の3つの異なった性格の建物が存在していたことを窺わせる。このうち不動倉＝穀物倉庫、兵庫＝武器庫とすることができる。「院」については『令集解』「戸令」の国郡司の条をみると、

国司巡部内。郡司待当郡院。

とあって、古代において「院」には役所などに付随する大きな建物との意味があったことが想定される。

この建物について考えるときに参考になるのが、『類聚三代格』貞観十八年三月十三日（876）条の、

応大野城衛卒粮米依旧納城庫事。

とする太政官符である。ここでは衛卒40人分の粮米毎月二十四斛は城の倉庫に納めていたが、役所の税庫に容れるようになって以来、

城辺人居。或屋舎頽毀。或人跡断絶。

状況に陥ったことに対して「城司」の受け答えがみられる。このことから大野城には城司の管理下に衛卒40人が置かれていたことが知られ、城司の管理棟施設として「城院」の存在を類推することが可能となる。菊池城の城院の存在に関する記録は天安二年まで遡上するが、『類聚三代格』「承和七年太政官符」の、

弘仁十四年正月二十九日（823）論奏。停主厨主船。始置主城二員。

とする記事の「主城二員」は、基肆城がこのころ文献に認められないことや基肆城出土遺物の最末期のものは9世紀初頭の須恵器であることから（田平1983）、ここでいう「主城二員」は大野城と鞠智城の2城に関するものとするのが十分可能であり、城の統括者としての城司やそれと関係する城院の存在は823年までは遡りうることとなる。そしてこの記事から大野城や鞠智城が9世紀中葉段階では実質的には殆どなにも機能していなかった様子を窺うことができる。「鼓自鳴」という類別の表現は、この頃の災害の予兆として多くみられるものであり、「同城不動倉十一宇火」の前触れであることを物語っている。『日本書紀』天武十四年十一月条（685）の「四方国に詔して」には、

大角小角鼓吹幡旗及弩・抛之類。不応存私家。咸収于郡家。

とあり、法螺貝などとともに軍隊を指揮する道具を郡家に収納することが求められている記事がみられる（直木1968）。これによりこうした道具が鞠智城に備えられていたことは容易に理解できるのであり、鞠智城の兵舎もしくは武器庫に備えられていた鼓が鳴ったことを窺わせる。

『日本三代実録』元慶三年の条にみられる「菊池郡城院兵庫戸自鳴」に続いての被害の記録は史書に記されることは無いが、このことは鞠智城に対して畿内政権はもはや何の関心も持ちえないものとなっていたことを示している。

白村江での敗戦後、畿内政権の眼は列島内の北と南の集団に向け注がれた。これは律令国家体制の整備の過程で、その正当性を裏打ちする「蛮夷を従える」という華夷思想の実体化を示すための行為の一環であった（吉田1994）。南島では文武2年（698）内附を求める一行が訪れたのを皮切りに、大宝律令施行に基づいての薩摩国、多楸国の建国に伴う編戸編成の強制に伴って、隼人の反乱がこの頃頻発した（井上1975）。隼人の反乱は数回に及ぶ。その第1回は700年、第2回は702年、第3回は713年、第4回は720年のことで、朝鮮問題が沈静化に向かうのに反して、8世紀前半期には九州南部地域が畿内政権にとっての愁眉の対象となったことがこれらの記事で知られる。そのために『続日本紀』文武天皇大宝二年十月条（702）の、

唱更国司等言。於国内要害地。建柵置戍守之。許焉。

という状態が醸し出された。このとき設置された「柵」の具体的な場所については諸説あり、特定することはできないが、これら隼人の反乱鎮圧には肥後からの出兵があったことが平城宮出土木簡で確認され、さらに薩摩国府のおかれた高城郡に合志、飽田（多）、宇土、詫麻（萬）など肥後4郡からの多数の移住が認められ郷をなしていること（井上1967、1975）、薩摩国分寺の建設費及び維持費は肥後から給付されていた（角田1938）ことなどをみると、奈良時代に

おける畿内政権の南九州支配に肥後が大きくかかわっていたことが知られる。鞠智城では8世紀段階において改築を加えながら礎石建物が林立すること、また天平様式の木簡の出土は朝鮮問題が終焉に向かうこの時期、なお太宰府を通して城としての機能が維持されていたことを示しているが、その背景として畿内政権にとっての南九州での「辺夷を律令国家体制に組込む」ことで生じる不穏な情勢（田中2004）に係わるものであることは容易に了解されよう。『日本三代実録』にみられる「菊池郡倉」がかつての「鞠智城」に設けられて倉庫群を指し示すものであれば、規模を縮小しながらも南九州における「不穏な状況」に対処するための兵站基地としてかろうじて意味を持っていたことの表現であると解釈されよう。

このように鞠智城をめぐる検討を重ねてくると、小田氏が提唱し、西住氏が分析したように、第1次掘立柱建物群段階は政庁風遺構配置をとるもので、斉明期に朝倉宮が陥落した場合の行宮として構想された段階と想定できる。次いで7世紀後半大宰府が都城として整備された（第1期）のに伴い鞠智城が山城としての機能を果たすように改築された段階（668年～689年以降）、南九州の動乱に備える機能を果たした段階（8世紀前半以降）に鞠智城の持つ意味が変化したことが窺えるのであり、9世紀に南九州が完全に律令体制に組み込まれることでその歴史的役割を終えたものと解される。向井氏や西住氏は大宰府陥落に備えての防御的な施設として鞠智城の創建目的を想定するが、それはむしろ一段階古い時期の斉明期の朝倉宮が襲われることに対する備えとするのが妥当する。大宰府が都城として本格的に整備されるに至ったことは、それに伴って鞠智城の持つ意味が大きく変化したことを物語るものである。このようにみると戦前の坂本経堯氏の鞠智城に対する歴史的意義付けの多くは今日なお多くは妥当性をもっていたことが知られるのである。

本文を草するにあたり熊本県教育委員会の野田、西住、村崎、矢野各氏から貴重な意見を得られたことを記して謝意を表したい。

なお本文は、韓国『道山学報』に掲載した論文（韓国語）を基に、一部補綴を加えて改めたものである（2005年3月）。

注

1. 斉明期の遺物が存在することの重要性について鞠智城整備検討委員会委員である坪井清足氏は強調されていた。
2. 八木充氏は古くからこのことを指摘しておられる。最近向井一雄氏は上津土塁とともにこの堤土塁には堀が認められることから「水城」であろうと想定している（向井一夫1991）。

引用文献

- 磯村幸男 1979「大宰府の防衛施設」『日本城郭大系』第18巻、新人物往来社
井上辰雄 1967『正税帳の研究』塙書房
1975「隼人支配」『隼人』社会思想社
大田幸博 1995「肥後・鞠智城」『古代文化』第47巻第11号

- 2004「甦る千三百年前の鞠智城」『先人の暮らしと世界観』熊本日々新聞社
- 小田富士雄 1985 a 『北九州瀬戸内の古代山城址』日本城郭史研究叢書第10巻、新人物往来社
1985 b 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書第13巻、新人物往来社
1993「熊本県・鞠智城をめぐる諸問題」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会編
- 鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房
菊鹿町教育委員会 1981『鞠智城跡調査報告書』
九州歴史資料館 1975『朝倉橋広庭宮跡伝承地』
1979『特別史跡大野城Ⅲ』
2002『大宰府政庁跡』
- 葛原克人 1994「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社
久保山善映 1931「鞠智城見学記」本文は熊本県教育委員会1993『鞠智城跡』に再録されている。
熊本県教育委員会 1983『鞠智城跡』
1991『鞠智城跡』
1992『鞠智城跡』
1994『鞠智城保存整備基本計画』
1997『鞠智城跡』
1998『鞠智城跡』
- 高正龍 1995「韓国古代山城」『古代文化』第47巻第3号
甲元眞之 2005「考古学的にみた6世紀の百済—九州関係」『百済研究』第41輯。
甲元眞之他 2002「先史時代の日韓交流試論」『青丘学術論集』第20集
坂本経亮 1937「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就いて」『肥後上代文化の研究』1979年所収による。
1953「鞠智城に擬せられる米原遺跡に就いて」『地歴研究』第10編第5号
坂本太郎 1955「天智紀の史料批判」『日本学士院紀要』第3巻第3号。後に坂本太郎『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964年に採録。
- 斎藤忠 1968「古代城柵の特質とその背景」『日本古代遺跡の研究』吉川弘文館
島津義昭 1983「鞠智城についての一考察」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館
成周鐸 1984「鞠智城の性格について」『日韓古代国際セミナー』後『肥後考古』第6号（1987）に再録。
- 田中聡 2004「蝦夷と隼人・南島の社会」『日本史講座』第1巻、東京大学出版会
田平徳栄 1983「基肆城考」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館
角田文衛 1938「国分寺の設置」『国分寺の研究』上巻、京都考古学研究会
坪井清足 1975「神護石」『古代史発掘』第6巻、講談社
東野治之 1983『木簡が語る日本の古代』岩波書店

- 直木孝次郎 1968『日本古代兵制史の研究』吉川弘文館
- 西住欣一郎 1999「発掘からみた鞠智城」『先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古会
- 西谷正 1999「朝鮮式山城」『岩波講座日本歴史』第3巻
- 平川南 1998「熊本県鞠智城出土木簡」熊本県教育委員会『鞠智城跡』
- 向井一雄 1991「西日本古代山城遺跡」『古代学研究』第125号
- 八木充 2002「筑紫における大宰府の成立」九州歴史資料館『大宰府政庁跡』
- 横田義章 1983「大野城の建物」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論集』上巻
- 吉田孝 1994「8世紀の日本」『岩波講座日本通史』第4巻、岩波書店
- 山尾幸久 1989『古代の日朝関係』塙書房
- 1999『筑紫君磐井の戦争』新日本出版社
- 渡辺正気 1988「神護石の築造年代」『斎藤忠先生頌寿記念考古学叢考』吉川弘文館

挿図の出典

- 第1図：島津1983
- 第2・3図：大田1995
- 第4図：熊本県教育委員会『鞠智城』1991
- 第5図：筆者作成
- 第6図：熊本県教育委員会『鞠智城』1998
- 第7図：熊本県教育委員会「鞠智城」1990